

1 4	岡 崎	矢 作 南 小 学 校	氏名 立山 颯馬
分科会番号	0 1 b	分科会名	国語教育（作文その他）

研究題目 書く目的と書き方の工夫の方法との出会いを工夫し、主体的に書く児童の育成
～小5 国語科『地域の魅力を伝えよう』の実践を通して～

1. 研究概要

（1）主題設定の理由

書くという行為は、非常に負荷の高い行為である。なぜなら、何を書くのかを決める行為、どのような構成で書くのかを決める行為から始まり、伝えたいことを思考の中から言葉に出力するという行為を経て、最後は選んだ言葉が本当に自分の伝えたいことを伝えられているか、間違っていないか、もっとよい表現はないか吟味する行為という大きく分けて三つの行為という過程に至るからである。さらに、文章を書くにあたり、情報収集、情報の正誤の確認もしなければならない。このように多様な行為を繰り返すことで、一つの文章が出来上がる。どの行為も認知的負荷が高いうえに、児童は書くということに面倒くささを覚える。それは、テストにおいて記述問題が増えたり、自分の書いた文章の間違いを指摘されたりして、書くことの負の側面に出くわすことが年を重ねるに連れて増えるからではないだろうか。「せんせい、あのね」から始まる「あのねちょう」。鹿島和夫氏の実践である。書き出しを工夫することで、児童たちの「何を書けばよいか分からない」状態を解消し、「先生に伝えたい」という目的と相手意識を明確にした。児童には「先生」という伝えたい相手がいて、伝えたいこと、伝えたい目的や理由が明確だからこそ、この実践は現在に至るまで広く受け継がれているのだろう。

現行の教科書における「書くこと」の学習では、学習課題が提示され、その課題に沿って文章を書くという展開が多く見られる。そのため、児童にとっては、「なぜこの文章を書くのか」「誰に伝えるのか」という目的意識を十分に形成する前に、書く活動に入る場合があるのではないだろうか。導入で教師が興味を持たせることも可能ではあるが、そこで得た興味が持続するとは限らない。そこで、単元の初めには「何のために書くのか」という目的と出会い、単元途中には「どのように書けば目的に沿った文章になるのか」という推敲の課題と出合うという、二度の課題との出会いを設定することとした。

本学級の児童は、どんな友達とも分け隔てなく接することができる優しさを有しておる、話をする児童に合わせて、使う言葉や言い方を変えて、どんな友達とも円滑にコミュニケーションを取れる能力に長けている。そんな学級には、生きた言葉が存在していると私は思う。一方で、授業のときなど物事をまとめる際に、書いて考えることや文章にすることには苦手意識を持っている児童が多く、書くことに苦手意識を感じている児童はクラスの半数近くを占めている。児童たちの意見としては、何を書いたらよいか分からない、どう書いたらよいか分からないという。それらのことから、書きたいと思う内容の設定や気持ちの醸成、書くための方略の獲得が必要だと考えた。そこで、「書く目的と書き方の工夫の方法との出会いを工夫し、主体的に書く児童の育成」と主題を設定した。

（2）目指す児童像と児童像に迫るための手立て

目指す児童像を下記の通り設定する。

書きたいという気持ちを高める出会いや書くための視点を獲得し、言葉による見方・考え方を働かせ、主体的に書く活動に取り組める児童

上記の児童像に迫るため、以下の仮説とそれに対する手立てを設定する。

仮説Ⅰ 書く活動に取り組む前に、児童が単元を貫く課題を立て、学校以外の仕事に従事する大人と出会うことで、児童の中での目的意識や相手意識、当事者意識が高まり、よりよく書こうという気持ちを高めることができるだろう。
手立て①：単元を貫く課題を、実生活の中から児童とともに考え、それに沿った授業を展開する。

手立て②：ゲストティーチャー等、外部の方を招き、一緒に授業を創る。

仮説Ⅱ 自力で文章を書いた後、モデル文を比較することで、推敲の視点を獲得することができ、文章をさらによくしようと書く活動に取り組むことができるだろう。

手立て③：教師が作成した二つのモデル文を比較し、推敲の視点を考える。

（3）言葉の定義

主体的

この実践における主体的という言葉は、単に自分から進んで活動に取り組んだ姿ということに留まらないこととする。教師が意図的に用意した教材との出会いや問いとの出会いのなかで、問題や課題を自分事とし、それらを解決するために自分の思考を巡らせながら活動に取り組んだ姿も主体的な姿とする。

言葉による見方・考え方を働かせる

言葉や文章中の符号などがもたらす効果を考え、どう言葉の使い方を工夫すれば自分の伝えたいことが伝わるのかを考え、作文活動に取り組むこととする。

4. 研究の実際

（1）単元計画（網掛け部分は総合的な学習の時間を活用）

授業の段階	時数	授業内容	手立て
書く前	第1、2時	岡崎市にはどんな魅力があるだろう。 ・岡崎市にはどんな魅力（人物、場所、物、イベントなど）があるか探求する。	①
	第3時	岡崎の魅力をもっと詳しく知るためにどんな方法があるだろう	①
	第4時	手に入れた情報を今後どうしたらいいだろう	①
	第5～8時	どうすればよりよいインタビューができるだろう	②
	第9時	自分の伝えたい岡崎の魅力は何だろう	
書いている	第10～16時	どうすれば魅力が伝わるタウン誌の記事が書けるだろう	③
書いた後	第17～19時	作ったタウン誌をこれからどうしたらいいだろう	②

(2) 抽出児童について

実践の成果を検証するために抽出児を設定する。

抽出児A

書くことに苦手意識をもっており、その理由として「書くのに時間がかかるから」と答えている。考えてまとめることにも苦手意識があり、日記のように自由に書く活動については特に苦手意識を示している。授業では基本的な問題解決に取り組むことができ、時折、物事を深く捉えた発言や独自の視点からの発言が見られる。しかし、発言は頻回ではなく、考えをもっていても、それを言語化することには時間を要する様子がある。このことから考えがないために書くことが苦手なのではなく、考えを整理し、言葉として表出するまでに時間を要することが、書くことへの苦手意識に繋がっている可能性がある。書きたいと思える内容や目的の明確化により、進んで活動に取り組む姿を期待する。

(3) 研究実践

①書く前の活動（手立て①、②）

「書く」という活動に取り組むにあたり、なぜそれを書くのかという目的と、誰に読んでほしいのか、届けたいのかという相手意識は、主題設定でも述べた通り重要なことである。それが単元を通して児童のなかに目標や意識として存在することは、児童の活動の主体性や目的を支えるものとなる。目的や意識の形成にあたり、生活の中に存在する問いや願いを活用することで、国語科において児童たちが書く必然性を感じられることを目指した。そこで総合的な学習の時間を活用しつつ、それらの意識を形成する時間を設けた（資料1）。この流れから第1時第2時では、岡崎にはどんな魅力（場所、食べ物、人物）があるのか意見を集めた（資料2）。魅力について児童たちだけから出現したものは、21番目紅葉狩りまでであり、児童が伝えたい魅力を決定するには、魅力の数が少なかったため家族などに聞いたり、家で調べたりするよう指示を出し、結果96番目まで、魅力を集められた。Aは「近江屋本舗」という矢作地区にある和菓子屋を述べた。児童たちは振り返りのなかで、「調べてみると意外といいところや有名なものが多くあった」「観光に来た人におすすめできるものもあった」と述べた。第3時には、観光客はどのように旅行先の情報を集めるのか考えた後、どうすればもっと詳しく岡崎の魅力について知ることができるかを考えた。児童からはインターネットで調べる、本で調べる、という意見が出た。しかし、「岡崎にいる私たちだからこそのこと」という視点で、観光客にもできるインターネットや本を使用する以外にできる情報の集め方はないかと問い返すと、人に聞くという意見が出た。そこで、誰に聞くのがよいかと問い返すと、地域の人、先生、警察、観光大使、実際にそこで働いている人等が挙がった。いちばん深い話が聞けるのは、携わっている人たちではないかと話がまとまった。第4時では、様々尋ねたり調べたりして集めた情報をどうしたいか考えた。児童の中からは、新聞を作る、クラスや学年に発表する、まとめるという意見が出てきたため、どうして岡崎の情報を集めているのかを再確認した。アジア競技大会などで岡崎に来る観光客に向けて、岡崎の魅力を伝えたいという目的で授業をしてきたことを想起させ、チラシを作る、インターネットで拡散する、広告にするとといった、情報を発信する活動が必要だと考えをまとめた。第3時で考えたとおり、インターネットでは集めることができない情報を発信するためには、実際にそこに従事する人に話を聞いて情報を収集する必要がある。インタビュー時に聞きたいことを聞き出すために、どのように話を聞けばよいかを国語科「知りたいことを聞き出そう」を活用し、考えた。

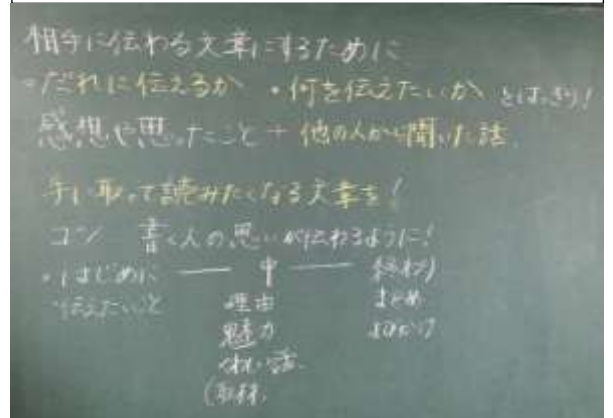
第4時までには児童たちは、岡崎の魅力を観光客に伝えたいという目的をもちながら授業を進めてきた。児童と授業で、最終的に魅力を発信できるものを作成する、そのために従事している人に話を聞く、という活動が必要だと分かった。そのため、どのようにタウン誌を書いたらよいか、インタビューしたらよいかを、教科書ではなく実際にそれを仕事にしている人から学ぶのがよいと考えた。そこで岡崎市役所の広報課の方に依頼し、授業を一緒にしていただいた。2時間の授業前半はインタビューのことを、後半はインタビューして分かったことや集めた情報をどのようにまとめたらいいか、ということ学んだ（資料3）。授業の中で相手意識、目的意識を明確にすること、聞いた話を取り入れること、読みたくなる文章にすること、書き手の思いを込めること、文章の構成のことをお話ししていただいた。この授業で聞いたことを基に、実際にインタビューをした。児童たちはそれぞれ、伝えたいと決めた魅力を決定し、そこに従事する人に来ていただいた。都合がつかない方には、教師がメールや電話などでやりとりをし、児童が気にな

T1: ゴールデンウィークはどこに行きましたか?
C: 京都! 東京! 三重! 岐阜!
T2: どうしてそこへ行ったの?
C1: 行きたい場所があったから。
C2: 見たいものがあったから。
T3: じゃあさ、岡崎にも観光客が来ると思うんだけど、どう?
C: えー、どこ行くんだろう…
T4: 秋にアジア競技大会があるの知ってる?
C3: あー! 中絶の!
T5: その試合とかを見に来る人って試合だけ見て帰るのかな?
C4: 観光もしていくと思う。
C5: ご飯を食べに行くと思う。
C6: お土産を買うと思う。
T6: 岡崎にはどんな魅力があるのかな?

資料1: 児童との対話



資料2: 集めた岡崎の魅力



資料3: 広報課の方との授業の板書



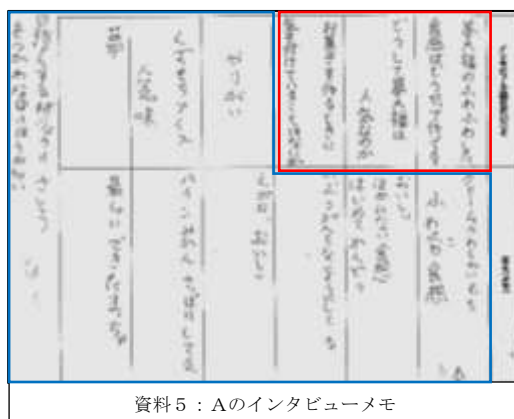
資料4: 近江屋本舗についてAがまとめたもの

っていたことに答えていただくという形で、知りたい情報を集められるようにした。Aは第2時にて自分で挙げた近江屋本舗についてインタビューをしたいと決め、公式のホームページの夢大福について書いてあることをまとめた（前頁資料4）。そこから資料5赤枠にあるとおり三つの質問をメインに考えた。広報課の方に教えていただいたことや、授業で考えたことを生かし、聞き取りのメモは短文で必要最低限にとどめ、一緒にインタビューをしたほかの児童の質問、話の中でAが必要だと思ったことをメモに残すことができた（資料5青枠）。資料5赤枠の、お菓子を作っている人がどのような思いなのか、お店の人が考える夢大福の人気の秘訣、やりがいやお菓子作りの工夫について知ることができ、インターネットだけでは得られない情報を入手することができた。インタビュー後の感想では、「とても緊張したけど聞きたいことをきちんと聞くことができてよかった」と話し、実際に活動することで得られるよさがあると感じた。

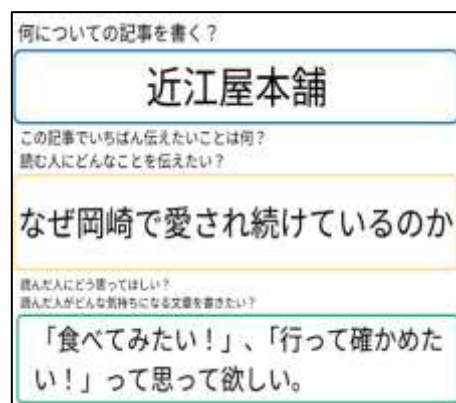
インタビューをしたことでタウン誌を書く材料を獲得でき、書くことに取り組む準備ができた。教師の用意した資料などを用いて、Aは資料6のように「なぜ岡崎で愛され続けているのか」を伝えたいという目的意識をもち、読んだ人が「食べてみたい!」、「行って確かめたい!」って思っただけいい」という目的や相手意識をもっていた。これらのことから、タウン誌を書く目的を共有し、自分の思いを基に情報を集めてきたことが、当事者意識の高まりに繋がり、Aの目的・相手意識の高まりへと関連していたといえる。また、文章を書くにあたり、どういう文章が読みやすい文章か、読みたくなる文章かを事前に考えた。資料7赤枠、ある児童が、「まとめてある文章が読みやすい」と答えたため、読みやすいとはどういうことを問うと、別の児童が、「『はじめ・中・終わり』にまとめてあると読みやすい」と回答した。これは、日ごろの説明的な文章のなかでも確認していることであり、さらに2頁資料3にて、広報課の方にお話ししていただいた内容にも基づいている。ゲストティーチャーによる授業が、児童の思考に影響を与えた部分だといえる。また、文章を読みたくなる工夫を考えた。写真やレタリングなどの見栄えの部分と、いいところで終わる、「…」など読み手の想像を膨らませる表現などを考えていた。

②書いている過程の活動（手立て③）

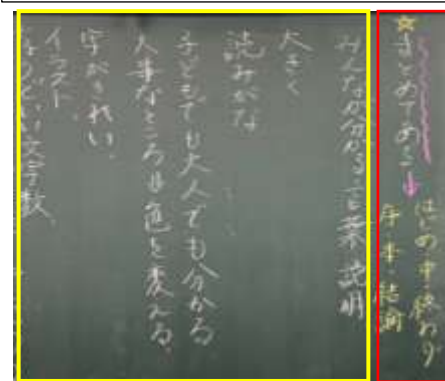
児童全体がある程度書き終えた段階で、文章をさらに読み手に伝わるようにするために、推敲の視点をもてるよう課題を提示した。比較をすることで、二文の違いから推敲について理解を深めることができると考えたからだ。そこで、まず比較をする前に修正前の状態の文章を提示し、どのようにしたらよいかを考えた（資料8）。資料8の黒線より、誤字脱字、敬体と常体の混同、句読点の脱落に気付くことができた。次に教師が用意した二つのモデル文を比較した。児童には教科書を参考にしてよいと伝えながらも、自力で書く姿が多く、新たな学びや書く力の大きな向上にはつながっていないと感じた。また、比較をすることで、先に行った活動よりも一段深い推敲の視点に気付くことができると考えたからである。比較をしたことでAは、書き手の思考（資料9桃線）、漢字の使用（資料9上部青線）、使用する言葉の選定（資料9下部青線）、「また」という言葉を使用することで文章のねじれがないようにしながら、書き手の伝えたいことを付加する方法（資料9黒線）の4つを見つけた。Aは「リピーター」という言葉の意味が分からず質問をしてきた。教師が意味を説明すると、「分かる言葉を使ってよ、自分だったら違う言葉を使うな」と答えた。そのことから、誰にでも意味が分かる言葉を使いたいという思いを抱いていたのが伺える。また全体交流では、「段落に分ける・振り仮名をつける・書いてあることは正しい



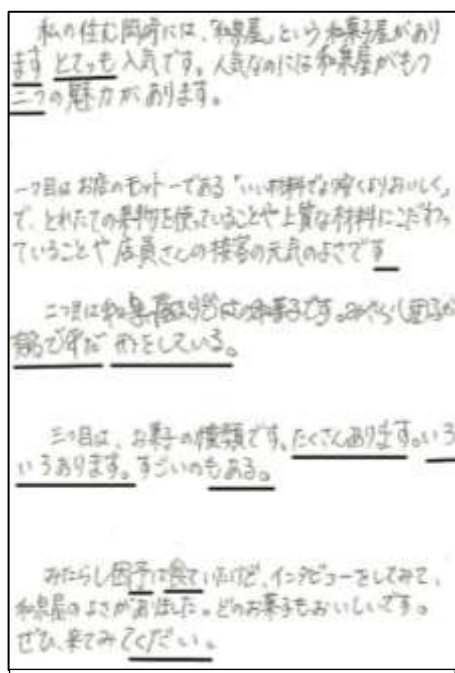
資料5：Aのインタビューメモ



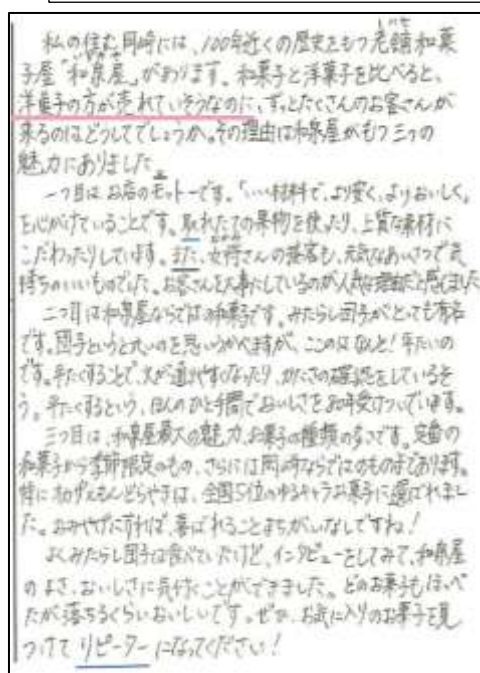
資料6：Aの記事に込める思い



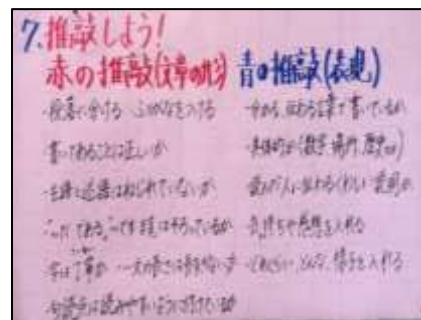
資料7：読みやすい文章について考えた板書



資料8：Aが見つけた改善できそうなポイント



資料9：資料8と比較して見つけた推敲の視点



資料10：推敲の視点（掲示）

で、二文の違いから推敲について理解を深めることができると考えたからだ。そこで、まず比較をする前に修正前の状態の文章を提示し、どのようにしたらよいかを考えた（資料8）。資料8の黒線より、誤字脱字、敬体と常体の混同、句読点の脱落に気付くことができた。次に教師が用意した二つのモデル文を比較した。児童には教科書を参考にしてよいと伝えながらも、自力で書く姿が多く、新たな学びや書く力の大きな向上にはつながっていないと感じた。また、比較をすることで、先に行った活動よりも一段深い推敲の視点に気付くことができると考えたからである。比較をしたことでAは、書き手の思考（資料9桃線）、漢字の使用（資料9上部青線）、使用する言葉の選定（資料9下部青線）、「また」という言葉を使用することで文章のねじれがないようにしながら、書き手の伝えたいことを付加する方法（資料9黒線）の4つを見つけた。Aは「リピーター」という言葉の意味が分からず質問をしてきた。教師が意味を説明すると、「分かる言葉を使ってよ、自分だったら違う言葉を使うな」と答えた。そのことから、誰にでも意味が分かる言葉を使いたいという思いを抱いていたのが伺える。また全体交流では、「段落に分ける・振り仮名をつける・書いてあることは正しい

か・主語と述語はねじれていないか・「～だ・である」「～です・ます」はそろっているか・分かる、伝わる言葉で書いているか・具体的か（数字・場所・歴史など）」など、それぞれ文章の形式にかかわる部分を赤の推敲、表現にかかわる部分を青の推敲としてまとめ、掲示した（前頁資料10）。また、児童にどちらが読みやすいかを問うと、教師が提示した文章の長い方（推敲後）の方が読みやすいと学級の全児童が答えた。その理由として、説明の詳しさ、書き手の気持ちが伝わること、どれくらいという量や様子が具体的に分かりやすいという意見が挙がった。それは、文章の長さに辟易することよりも、自分の伝えたいことを伝えるために、また読み手が困らないようにするためには、正確に情報を伝えないといけないということをモデル文の比較から理解したからだといえる。一方で3頁資料7では、「ちょうどいい文字数」という意見も挙がっている。書き手が伝えたいことを不足なく伝えるために必要な文字数と、読み手が読みやすいと思える文字数を擦り合わせる推敲をしていかなければいけない。使う言葉の精選や表現の工夫という推敲の重要性が感じられる交流となった。今回考えた推敲の視点を基に、自分の文章をさらによくすることを伝え、推敲を開始した。また、次時では、授業の始めに広報課の方に協力していただき、児童たちの作成した文章を読んでいただいた感想と、こういう点に気を付けるとよいというビデオメッセージを作成していただいた。それを視聴し、どういう推敲の視点が足りていないかを学ぶ機会となった。提示していただいた推敲の視点は、主述は正確に対応しているか、接続詞は正しく使われているか、言葉の重複はないか、事実と考えが混同していないか、自分の気持ちが表れているかという視点を提示していただいた。推敲の段階は2時間に分け、自分たちで考えた視点と提示された視点の二つから児童たちは活動に取り組むことができた。

資料11は書き出しの部分である。資料11の黒線より、推敲前の約115年と細かい数字から、100年近くという表現に変更した。また「近江屋本舗という和菓子屋」とすることで、初めてその名前を見る人でもどういいう店が分かるように表現を変更した。資料11の赤線では、教師のモデル文にも示したような、書き手の考えが表出されるよう、表現が付加されていた。近江屋本舗が、なぜ岡崎市で愛されているのか、時代が変わった今でも人気を保ち続けているのかというAの感じたことを基に文章が詳しく展開されるよう変化した。

資料12赤丸では「！」の付加により、働いている人のお客さんに「よろこんでほしい」という前向きな気持ちの強調や、文章の親しみやすさが増した。

資料13はAが書くのに困っていた部分である。インタビューの中で、保存料についてのお話があった。近江屋本舗の方の話では、お菓子に保存料を使用することで、長期の保存が可能になる一方で、保存料を使用しないものと比較して風味が劣ると仰っていた。しかし、それは何を優先するのかであり、一長一短であるとのこと。難しい話であり、そのお店の意向もあることなので、そこまで気にしなくてよいということだったが、Aは夢大福のおいしさの秘訣に、保存料を使用せず、多少期限が短くなっても、おいしいものをお客さんに届けたいというお店の思いが魅力であると考えた。しかし、Aのなかでは資料14の青枠の振り返りにもあるように、保存料を使用しないことでどうおいしくなるのかという点について文の書き方や伝え方について悩んでいた。そこで資料15のようにAと対話をした。ここでAに考えてもらいたいのは、保存料を使わないことで味がよくなるのではなく、保存料を使うことで風味が使わない場合よりも劣ることと、保存料を使わないことが絶対いいというように読み手に受け取られないようにすることである。このやり取りを経て、Aは資料13赤線にあるように、「期限は少し短くなってしまいますが」と前置きをし、「素材のよさをたもつという近江屋本舗のこだわりがある」とまとめることができた。また2頁資料4と比較しても、近江屋本舗の夢大福が「やわらかい羽二重餅とクリームを使用しているからもちもちの食感を保つことができています」というインターネットの情報のまとめから、自分の伝えたいことを駆使した、さらに一步踏み込んだまとめに発展させることができた。次頁資料16の振り返りにもあるように、「悪い情報みたいになっちゃうから近江屋本舗のこだわりって書いて魅力なんだと思ってもらえるように」と、教師との対話や自分の伝えたい思い、お店や読み手への配慮がなされた文章にすることができたと述べている。

わたしの住む岡崎市には、(伝えたい魅力の紹介)近江屋本舗があります。(くわしい紹介)A長いはさしを持つ和菓子屋近江屋本舗があります。(くわしい紹介)約115年前がという

資料11：Aの作成した文章（推敲前（下）後（上）の比較）

わたしの住む岡崎市には、(伝えたい魅力の紹介)近江屋本舗があります。(くわしい紹介)A長いはさしを持つ和菓子屋近江屋本舗があります。(くわしい紹介)約115年前がという

1つ目は、ここでしか食べられない夢大福があることです。おもろいふわふわとした食感と中のやわらかいムースが合わさってこのやわらかさに...このふわふわとした食感、はここでしか味わえません。手作りで盛り上げるお菓子は、働いている人の「よろこんでほしい」という気持ちが伝わります。

資料12：Aの作成した文章（推敲前（下）後（上）の比較）

1つ目は、(情報)ここでしか食べられない夢大福があることです。おもろいふわふわとした食感と中のやわらかいムースが合わさってこのやわらかさに...このふわふわとした食感、はここでしか味わえません。手作りで盛り上げるお菓子は、働いている人の「よろこんでほしい」という気持ちが伝わります。

2つ目は、日持ちする食料をあまり使っていないことです。日持ちする食料をあまり使わないことでよりおいしくなっています。夢大福は、素材のよさをたもつという近江屋本舗のこだわりがあるからです。

資料13：Aの作成した文章（推敲前（下）後（上）の比較）

2つ目は、(情報)日持ちする食料をあまり使っていないことです。日持ちする食料をあまり使わないことでよりおいしくなっています。夢大福は、素材のよさをたもつという近江屋本舗のこだわりがあるからです。

日持ちしない材料を使わないことで美味しくなる事を伝えたいのにうまく伝わりにくからどうすればいいか分からなかった

資料14：Aのふりかえり

- T1：どう、昨日悩んでいたとこ上手に書けそう？
A1：難しいです。
T2：昨日の振り返りのところにコメント書いたんだけど、見た？Aはどうしてこれが書きたいの？
A2：近江屋本舗は期限よりもお客さんの笑顔を大事にしているところが魅力だと思ったから。
T3：なるほどね。じゃあ、保存料を使うよさと、使わないよさの両方を書いたらいいんじゃない？それか、保存料を使わないことでどうなるかしっかり書いたらいいと思うよ。

資料15：Aとの対話

資料17では、赤線部分、「工夫」という言葉が付加された。それにより、資料17黒線の行為が、お店がただ注意していることではなく、意識的に行っているお店の魅力だと価値づけた。

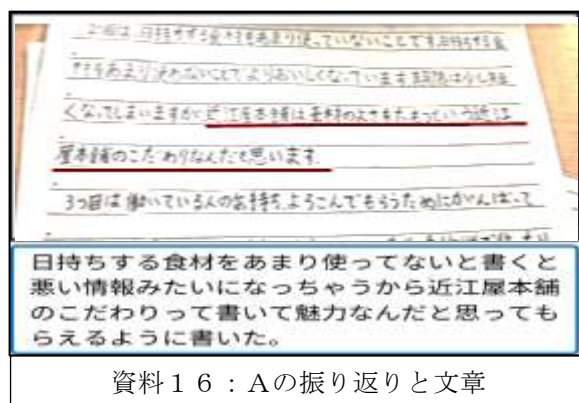
資料18はタウン誌の終末の部分である。変化した部分は、赤線部分である。推敲前は「足をはこんでみてください」、後は「食べてみてください!」となっている。見直しをしていくなかで、書く前に考えた読んだ人にどんな気持ちになってほしいかというところに立ち返り(3頁資料4)、食べてみたい、行ってみたいという気持ちを引き起こすために変化した部分である。また、Aはどの年齢の人でも読みやすいようにとすべてを漢字で書き、読み仮名を振るという作業にも取り組んだ。読み手を意識した作文が確かに行われていた。

推敲が終わった段階で、児童たちに「この文字だらけのタウン誌を読みたくない」と問いかけた。児童たちは「いやだ、読みたくない」と答えた。そこで、どういうふうになれば、読む人たちがもっと読みやすい、読みやすいと思えるものになるかを考えることにした。児童からは、イラストや写真を入れる、文字に線を引く、文字の色を変える、文字の大きさを変える、見出しを付けるなどの意見が出た。これらの意見を基に、A4の白い紙に再び書き起こしていき、ついに完成した(資料19)。文章自体は前時までに作ったものと同じだが、「岡崎で愛され続ける和菓子店とは…」と題名が付いたり、夢大福の柔らかさを伝えるために、写真を貼り付けたりした(資料19赤枠)。Aは振り返りの頑張ったこと、工夫の中で、どんな人でも読みやすいようにする工夫、見出しの工夫、伝えたいことを詳しく書く工夫を凝らした(資料20赤線)。その工夫のどれもが、授業の中で考えたことである。振り仮名に関しては、低年齢の人でも読みやすいようにするという工夫が授業の中で話されたが、Aは大人でも読みやすいように漢字で書くという視点を取り入れたうえで、振り仮名を振って全年齢が読めるようにした。そこから、Aの相手意識が確立されていることが分かる。また、見出し「岡崎で愛され続ける和菓子店とは…」や本文中に表れた「このやわらかさに…」の「…」の部分には、Aが書き手として言い切るのではなく、読み手の想像を膨らませられるように文章に余白を残したり、題名に書きすぎないことで本文の内容の方に読み手の気持ちを誘導したりするような工夫が施されていた。これはAの読み手を意識した配慮であり、読み手に伝わるよう具体的に書く部分と、長い文章の中で読み手に飽きさせない部分を融合させたものだといえる。イラストや色の付け方にも拘り、活動することができていた。

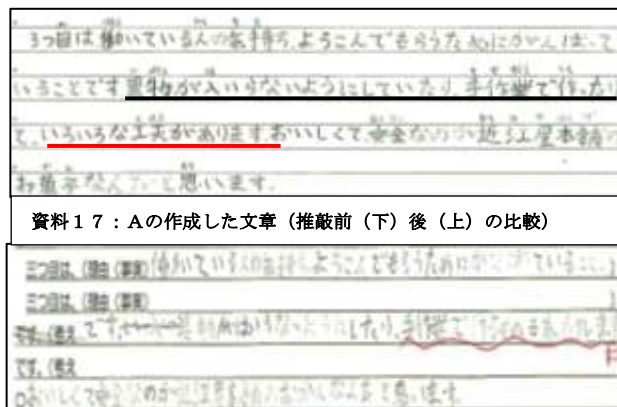
③書いた後の活動(手立て①)

文章が完成し、タウン誌の記事の完成を間近に控え、児童たちとこの作ったタウン誌の記事をどうするかを考えた。児童の中からは学校に置いて見てもらいたいという意見や観光客とかに見てもらいたいという意見が出た。観光客に岡崎の魅力を伝えるという目的をもって取り組んできた成果である。そこで、どこに置いたらよいかを考え、観光客など岡崎以外の人が集まる場所、単純に人が集まる場所が挙げられた。その中から、中央総合公園、岡崎駅、東岡崎駅、道の駅、アウトレット岡崎、イオンモール岡崎、サービスエリア岡崎が候補に決定し、児童が電話を通じて直接依頼をした。依頼を受け、大丈夫ですとご回答をいただき、電話した児童が結果を学級で報告をすると、「やったー、すごい」という声が多く聞こえた。人に見せるという目標で行ってきた活動が結実した瞬間だった。

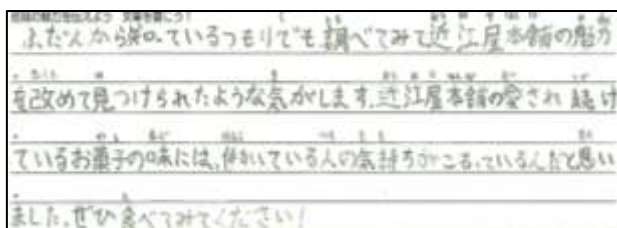
最後に授業の振り返りを行った(資料20、21)。Aは、普段の授業よりも書きやすさや自分が頑張って授業に取り組めたことを実感している。その背景として、振り返りにもあるように、授業の流れと思考の流れを整理したこと(資料21赤枠)と、Aの思いに即して授業が



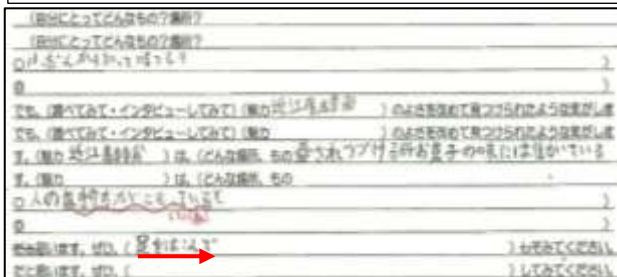
資料16: Aの振り返りと文章



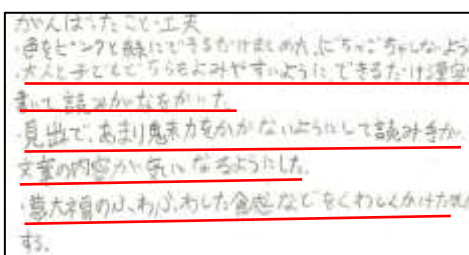
資料17: Aの作成した文章(推敲前(下)後(上)の比較)



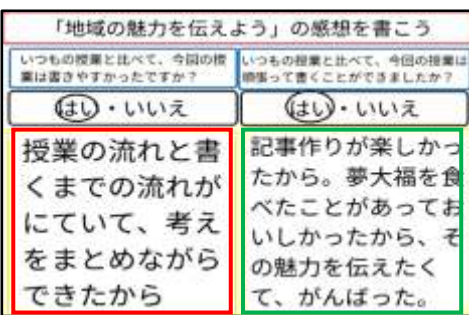
資料18: Aの作成した文章(推敲前(下)と後(上)の比較)



資料19: Aの最終原稿



資料20: Aのふりかえり



資料21: Aの単元のふりかえり

進行したことが挙げられる。タウン誌を書くまでに、どうしてそれを書くのか、書くために必要なことは何か、書いたものをどうしたらよいか、という大きな流れで行ってきた。その結果、ただ書いて終わるだけでなく、必要感を感じながら活動に取り組むことができていたといえる。一単元の短い時間の中で書くというよりも、時間をかけて流れを作ることで、伝えたいことが整理されていた。また、Aは和菓子が好きであると述べ、自分の生活の中にあるものについて、実際にお店の人に話を聞いたことや、自分が心の底から伝えたいと思ったことが確立したこと（資料2 1 緑枠）、伝えたい相手をきちんと設定したことが、Aの頑張れたという実感につながったと考える。

3. 実践の検証

目指す児童像に迫るために研究仮説を設定し、それらを検証するために実践を行った。その実践の検証を、児童の変容から仮説①、仮説②に対する手立ての有効性を述べる。

(1) 仮説Ⅰに対する手立ての検証

手立て①：単元を貫く課題を、実生活の中から児童とともに考え、それに沿った授業を展開する。

本学級の児童に、岡崎市で観光するならどこに行くか、岡崎に観光で来る人はどこに行くのだろうかと発問をした。3頁資料1の段階では、児童たちは岡崎市にはどんな魅力があるのか、まだ気付いていない状態であった。しかし、インターネットで調べたり、お家の人と一緒に考えたりするなかで、私たちの住んでいる町にも魅力がたくさんあることに気付くことができた（3頁資料2）。秋にあるアジア競技大会という大きなイベントで岡崎に来る人が多くなることが予想され、実際に岡崎に来た人に魅力を伝えたいという当事者意識がより育まれることになった。インターネットで得られる情報ならば、観光客にも調べられるため、岡崎市に住む私たちだからできることは何かを考え、実際に地域で働く方への取材という方法を選択した。このことから、児童は課題解決のために情報収集の方法まで主体的に考える姿が見られた。これは、児童がその課題をどうすれば解決できるのかという方法をよりよい形にしようとしたからである。そこには、課題解決の目的が明確になっていたからこそその思考だといえる。Aは、地域の和菓子屋を伝えたい魅力に設定し、実際にその和菓子屋で働く人に話を聞くことができた。Aはインターネットで調べて分かったことを3頁資料4のようにまとめ、どのようなことを尋ねたいかを4頁資料5のように考えた。また実際に話を聞いたことで、他の児童の質問から大事だと思うことをメモしたり、資料のように伝えたいことを明確にしたりすることができた。それはAの「とても緊張した」という感想にも表現されているように、学びを自分事にして取り組むことができていたからである。集めた情報を観光客に発信するという目的意識と相手意識のもと、書く活動に取り組んだ。最後、完成したタウン誌をどうするかを児童に問い、多くの人に見てもらうためには、多くの人がある場所に置いてもらう必要があると考え、どの場所に置くのがよいかを選定し、電話にて児童の口から依頼した。すべての活動を終え、Aは5頁資料22のように感想をまとめた。「記事作りが楽しかったから。」「夢大福を食べたことがあっておいしかったから、その魅力を伝えたくて、がんばった。」と述べた。記事作りの楽しさを生み出したのは、課題を自分事として捉え、どう活動したらよいかを考え主体的に学習に取り組んだ成果だといえる。また、自分の生活経験と結び付けながら題材を選択していたことが分かる。これは、課題を自分事として捉えていたことの表れであり、主体的に学習へ取り組んだ姿といえる。

手立て②：ゲストティーチャー等、外部の方の力を借りて、一緒に授業を創る。

市役所の広報課の方にご来校していただき、インタビューの仕方と記事の書き方の授業を3頁資料3のようにしていただいた。また、4頁資料5のように直接インタビューをして話を聞くことで、ホームページからでは得られない情報を入手出来たり、新たに伝えたいものを入手出来たりした。4頁資料7のように、広報課の方に聞いた話が授業の中で生かされていた。4頁で述べたが、児童の書いた文章を実際に読んでいただき、感想と助言をいただいた。Aの話からも、外部の方の話を聞くことは緊張感があり、児童にとってもよい刺激のあるものであった。様々な場面で大人の方と交流をしたことで、Aは3頁資料6のようにどんな記事にしたいかという思いをもち、取材を通して新たに得た情報の価値に気付くようになった。また、このことから、取材を通して得た情報を「伝えたい内容」として捉え、記事に生かそうとする意識が高まったと考えられる。ゲストティーチャーの方と一緒に授業をして、様々な人の思いに触れることで、Aの中に地域の魅力についての知識がより深まり、自分の伝えたい内容が具体化された。その結果、伝えたいことが明確になり、書きたいという気持ちや書く必然性を支える活動になった。ゲストティーチャーとは3つの場面で交流をし、書く・インタビューをするための知識、伝えたい内容、読み手意識の獲得を児童にもたらしした。

以上より、手立て①、手立て②は有効であり、仮説Ⅰの妥当性が実証されたといえる。

(2) 仮説Ⅱに対する手立ての検証

手立て③：教師が作成した二つのモデル文を比較し、推敲の視点を考える。

文章をよりよくするためには推敲が必要である。そこで、3頁資料8、9の二つの文章を提示し、どの部分がよりよくできそうかを考えた。個人追究と全体交流をして、いくつか推敲の視点を獲得し、3頁資料10のように、形式的な推敲、表現的な推敲の二つを示した。Aはそれを受け、4頁資料11、12、13、5頁資料17、18のように自分の文章を見直し、よりよくしようとした。そこには、相手意識と言葉による見方・考え方を働かせ、どのような言葉を使えばよいかを考えた結果である。5頁資料20のように、獲得した推敲の視点を自分の中で再解釈し、自分の作品に生かすことができた。しかし、推敲の視点が文の比較から多くの数が挙げたこと、広報課の方からいただいた推敲の視点と多くのことがあり、児童の中にはどれを基に活動に取り組めばよいか分からなくなっている姿が散見された。Aは提示した推敲の視点を活用して文章を改善していた。しかし、児童によっては視点が多くてどうしたらよいか困っている姿も見られた。視点自体は3頁資料10のように教室に提示していたものの、自分の文章に何が足りていないのか、何を優先して見直せばよいか判断に困っていたり、自分の文章の改善点に気付く視点が足りていなかったりしていたと考えられる。

以上より、手立て③は有効であったものの、視点の扱い方について工夫をするなど、改善の余地があり、仮説Ⅱの一定の妥当性が実証されたといえる。

4. おわりに

本研究では、児童の思いに沿った授業の課題設定と、学校外の人との交流により相手意識や目的意識が形成された。また、推敲の視点を獲得したことで、自分の文章を主体的に見つめ直し、言葉による見方・考え方を働かせながら書く活動に取り組む児童の姿を見ることができた。児童の中にそれぞれの意識を形成することで、児童は書きたいという思いを膨らませられた。これからも児童の思いを主軸に授業を展開していきたい。